

I 今回の研究について

研究主題

「豊かに表現する児童生徒」を育む授業の在り方

1 研究主題設定の背景

(1) 本校の教育目標について

本校の教育目標は、「自分のもっている力を精いっぱい発揮し、積極的な社会参加を目指す」であり、学校経営の方針は、「児童生徒一人一人の実態を的確に把握し、個性や能力・特性を生かしながら「生きる力」を育む教育を推進する。」である。児童生徒一人一人によって将来の生活の過ごし方は異なるが、個々が自分の力を十分に発揮して豊かな生活を送ることを願い、将来の社会的自立の基盤づくりに向けた教育活動を展開している。本校で学ぶ児童生徒は知的障害のある児童生徒で、一人一人の実態を的確に把握し、個性や能力・特性を生かしながら「生きる力」を育むことができるよう、小学部、中学部、高等部が連携した学習指導、生徒指導、進路指導に努めている。また、一人一人の障害や特性に応じた指導や支援を効果的に行うため、個別の指導計画や学習指導案の作成においては「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「技能」、「知識・理解」の観点別に実態把握、目標設定、評価を行ってきた。

(2) 前回の研究の成果と課題について

平成26年4月から平成27年7月まで、「授業における自己評価システム構築と環境設定に関する実証的研究」という研究主題のもと、児童生徒が学習場面において自己評価を行うことにより、適正な行動が増えるであろうという研究仮説を立て、研究に取り組んだ。この研究は、平成25年度の研究である、「働くための環境設定とシステム作成の試み」の成果と課題を受け、児童生徒による自己目標の設定、自己評価、他者評価できる環境設定をマニュアル化し、児童生徒の変容から指導内容や方法を追求したものである。この研究により、自己評価は児童生徒の学習課題の獲得や情意面の向上に有効に機能し、自分の行動に目を向けるきっかけにつながったことが成果として得られた。また、一人一人に応じた目標設定や評価の環境を整えることは、児童生徒の自己理解を促し、自己形成につながるということが確認できた。課題としては、児童生徒が自己目標の設定や自己評価をする上で、自分自身を表現するための力を育てること、また、児童生徒が学習に対してどのような視点で向き合っているのか、外部からの情報や刺激をどのように認識し、理解・判断して次の行動につながられるのか、私達教師は、児童生徒一人一人の内面に深く目を向けて指導に努めていくことが必要であるということが挙げられた。

(3) 特別支援教育に関わる動向について

現行の「特別支援学校学習指導要領」では、『「生きる力」を育む要素の一つである「確かな学力」は、知識や技能だけでなく、学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等まで含めたものである。』としている。（現行学習指導要領2008年）

また、「障害者の権利に関する条約第24条 教育」では、次のことが目的とされている。

- (a) 人間の潜在能力並びに尊厳及び自己の価値についての意識を十分に発達させ、並びに人権、基本的自由及び人間の多様性の尊重を強化すること。
- (b) 障害者が、その人格、才能及び創造力並びに精神的及び身体的な能力をその可能な最大限度まで発達させること。
- (c) 障害者が自由な社会に効果的に参加することを可能にすること。

これらのことを踏まえ、本校の児童生徒が将来の自立や社会参加に向けて必要な力を身に付けていくために、効果的な指導につながる計画的な授業実践を行うことが必要であると考えます。

2 研究主題について

「表現」とは、自分の思いをしっかりともち、これまで学習してきたことや身に付けてきたことを試行錯誤しながら自分なりに考え、判断し、積極的に表していくこと。

本研究主題は、『「豊かに表現する児童生徒」を育む授業の在り方』と設定した。前回の研究課題と本校の児童生徒の実態、教育の動向を踏まえ、児童生徒一人一人は思いや考えをもった存在であり、その思いや考えを様々な形で表すことができるよう、彼らの内面に対する見方・考え方を丁寧に行い、指導や支援を行っていかうとするものである。

私達教師は、日々、児童生徒が自分の思い、感じたことを豊かに伝えてほしいと願い、指導にあたっている。本校の児童生徒（知的障害）は、活動には意欲的であるが、自分の思いや伝えたいことを言葉や行動にして表すことが難しく、受け身的になったり、自信のないことには消極的だったりして、もっている力を十分に出しきれていない面がある。このことは、児童生徒の障害に理由があるのではなく、私達教師が、児童生徒一人一人は思いや考えをもった存在であり、どのように児童生徒と向き合い、指導していく必要があるかということを再認識するに至った。

そこで、「表現」とは、「自分の思いをしっかりともち、これまで学習してきたことや身に付けてきたことを試行錯誤しながら自分なりに考え、判断し、積極的に表していくこと」とし、児童生徒の内面の表れであると捉えた。そして、豊かに「表現」している姿とは、人とのかかわりを楽しみ、できる自分、頑張った自分に達成感を感じていること、つまり自分らしさを発揮することになり、本校の教育目標である「自分のもっている力を精いっぱい発揮する」児童生徒を育み、将来の社会的自立の基盤につながると考えた。

「表現」を主題にした先行研究には、言葉、言語活動を軸にしたものがあるが、本校の児童生徒の実態を考え、言語活動に限らず、運動、絵や作品、音楽活動等、「表現」の内容は教科等（指導形態）によって様々であり（図1）、教科等の特性を生かして幅広く「表現」を捉えることとした。そして、それぞれの授業実践の中で「表現」を引き出すことが心身ともに充実した学校生活につながり、「豊かに表現する児童生徒」に育っていくと考え、研究として取り組んでいくこととした。

児童生徒が学習活動に進んで参加し、活動を通して彼らの内面の充足を図ることができるよう、私達教師は、児童生徒の様々な「表現」を受け止める姿勢をもつことを基本とし、児童生徒の反応から授業を分析、改善を通してどのような支援をしていけばよいか明確にすることで指導を充実させることができると考えた。

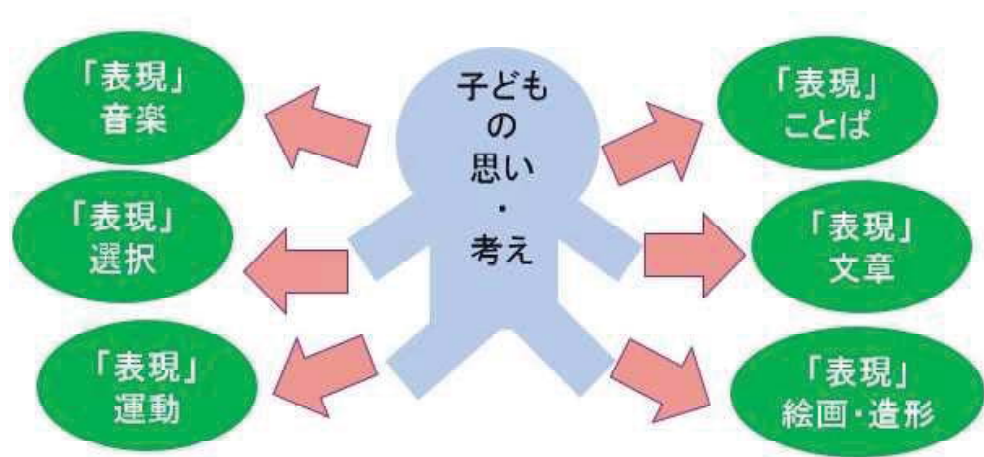


図1

3 研究目的

子ども一人一人が自分の思いを豊かに表現するための、支援の方法を探る。

4 研究仮説

各教科等における児童生徒の「豊かに表現している姿」を明確にし、それをめざした授業設定や支援を行うことで、児童生徒は自分の思いを様々な形で表すことができるだろう。

5 研究計画

本研究は、平成27年8月から平成29年7月までの2年の計画で行う。主な活動内容は次のとおりである。

月	主 な 活 動
平成27年 8月～3月	・研究主題の設定 ・研究グループの設定（5グループ：国語，音楽，図画工作・美術，体育・保健体育，自立活動） ・研究グループ（各教科等）で「表現」の定義，段階表を検討する。
平成28年 4月～12月	・公開研修会（6月22日） 『教育実践を「接面」から振り返る』 ー子どもの表現意図を教師が感じ取るためにー 講師 京都大学名誉教授 鯨岡 峻 氏 ・実践授業と事例の決定，具体的実践 ・エピソードと数値の両面で，児童生徒の表現の変容を捉える。 ・協同研との連携 ・全校研究（中間発表）
平成29年 1月～3月	・紀要の執筆 ・全校研究（成果発表）
4月～7月	・公開研究発表会に向けた授業構想，授業作り ・協同研との連携 ・公開研究発表会（7月13日） 「豊かな表現を育むための教授学的根拠を考える」 講師 元鹿児島国際大学福祉社会学部児童学科教授 成田 孝 氏

6 研究内容と方法

（1）研究体制

研究グループは、「表現」の捉えを各教科等に降ろし，国語，音楽，図画工作・美術，体育・保健体育，自立活動の5つの教科等に設定した。研究グループのメンバーは，児童生徒の生活年齢や発達段階を考慮しながら変容を客観的に捉え，教師の様々な意見を率直に交換できるよう，これまでの学部研究から，学部の枠を越えて縦割りグループを編成した。

（2）「表現」の定義

研究主題の「表現」を基に，教師が願う児童生徒の姿を教科等の特性を踏まえて次のように定義した。（表1）

教科等	「表現」の定義
国語	音声や文字を通して内容を理解し、状況や思考、感情などを伝え合うこと。
音楽	「鑑賞」や「表現（歌唱、器楽、身体表現、創作）」における相互の活動の中で作られた音や音楽。
図画工作・美術	作品の制作過程及び結果として、行為を形にしたり、自分の想いや感じたことを表したりすること。
体育・保健体育	一人ひとりが目標に向かって精一杯身体を動かす姿。
自立活動	どうしたら相手に伝わるか、児童生徒が自己選択、自己決定して発信すること。

表１ 研究グループにおける「表現」の定義

（２）「表現」の段階表の設定

研究を進めるにあたり、個々の実態に合わせて段階的に表現を豊かにしていく支援を行うため、各グループで「表現」についての段階表を作成し、目標設定や評価に活用することにした。段階表は、各グループの「表現」の定義と児童生徒の実態をベースに、３段階に設定し、「表現」の変容を総括的に、客観的に評価するものとして、また、単元・題材における「表現」の変容を評価するものとして作成した。段階表については、各グループの実践報告に記載する。

（３）支援の方法を考える

「豊かに表現する児童生徒」を育む支援については、各教科等の特性を生かした指導内容の下、授業の題材設定の他、「表現」の定義と関連付けた児童生徒個々の目標達成に向けてアプローチ内容を各グループで検討した。児童生徒の学習の様子や評価を話し合い、PDCAサイクルに基づいた授業改善を通して、児童生徒自身が身に付けている力を発揮しながら活動に取り組むことができるような学習の場を設定したり、手立てを工夫したりするなど改善を行い、児童生徒の豊かな表現の育成に向けた授業を作っていくことを教育的にアプローチすることとして捉えた。

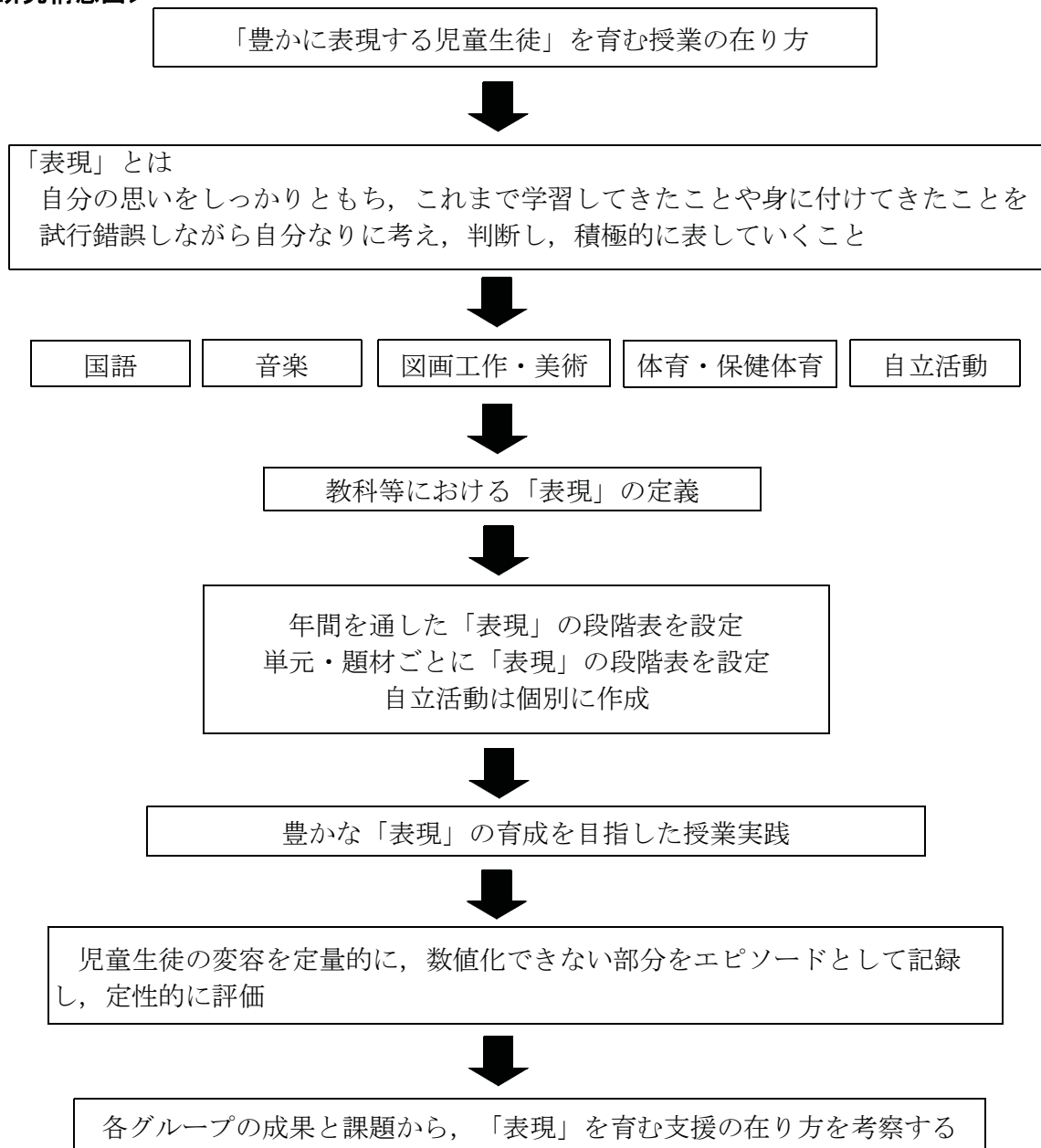
また、前回の研究で行った児童生徒の自己評価、相互評価を継続し、表現を豊かにしていくための支援の一つとして実践していくことにした。

（４）評価、変容の分析

表現の変容を評価する資料としては、テストや授業中のノート、作品、児童生徒の発言の記録等があるが、本校は、平成２５年度の研究から量的と質的な評価を取り入れ、児童生徒の変容を分析的に見る方法を取り入れている。本研究でも、「表現」が技能面等に表れ測定が可能なものや評価基準を設定することで、「何ができたか、できなかったか」、「どの程度できたか」を評価することが可能なものは数値化し、学習の中で児童生徒が見せる表情や言葉などは質的評価として動画による記録からエピソードにまとめた。また、児童生徒の作品等も評価の対象とし、作成している過程での様子と合わせて記録した。これらを「表現」の変容として評価することで、指導内容や指導方法、手立てなどの支援方法を協議し、授業を改善することで支援の在り方を探ることにした。

児童生徒の記録を指導や支援の改善に生かすため、平成２８年６月２２日、鯨岡峻氏を迎え、エピソード記録、エピソード記述に関する講演をいただき、学習の様子とともに児童生徒の内面に着目し、考察して記録することの大切さを再認識し、授業実践に生かすことにした。

＜研究構想図＞



【参考文献】

- 1) 黒川建一編著（1990）表現 新・幼稚園教育要領 感性と表現に関する領域．ひかりのくに
- 2) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（2015）専門研究B 知的障害教育における組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策に関する研究－特別支援学校（知的障害）の実践事例を踏まえた検討を通じて－平成25年度～平成26年度研究成果報告書
- 3) 文部科学省（2009）特別支援学校学習指導要領
- 4) 鯨岡峻（2005）エピソード記述入門 実践と質的研究のために．東京大学出版会
- 5) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（2006）課題別研究報告書
- 6) 筑波大学附属久里浜特別支援学校（2014）自閉症教育実践研究協議会実践研究集録 知的障害を伴う自閉症幼児児童の「表現する力」を育てる指導【2年次】
- 7) 文部科学省（2010）児童生徒の学習評価の在り方について（報告）
- 8) 東篠吉邦・大六一志・丹野義彦編（2010）発達障害の臨床心理学．東京大学出版会